

ボランティア活動のなかに生きて

アガリン・サラ ^{ながせ}長瀬

はじめに

貧しい人々、抑圧され搾取された民衆に奉仕するための書物は、実際にコミュニティーのなかでその内容が実践として示され人々に理解されなければ、意味あるものとはいえない。そのような観点から、私がこれまでにしてきたこと、現在していること、そして今後にむけた展望についてここに記していきたい。この個人史、個人的経験がNPO/NGOで活動する人々、教会の宣教師、公務員として働く人々に何らかの励ましと教訓を与えられればと願っている。

この文章のなかでは以下のようなことに記していく。子ども時代、ミンダナオのNGO職員として活動した高校時代、最初の日本訪問、ドイツへの旅、アメリカへの旅、KAFINでのボランティア活動、2001年Bayaning Filipino賞（アジア太平洋部門）の受賞、日本とミンダナオでのボランティア活動、そして忘れることのできない様々な経験である。

子ども時代

私はミンダナオ南部の小さな村で、産婆さんの手によって取り上げられた。海にはたくさんの魚が泳ぎ、樹木が生い茂る森には金や銀などの鉱物がねむり、新鮮な野菜や果物など食糧も豊富だった。そこではモロ（フィリピンにおけるイスラム教徒）の人々とキリスト教徒がこうした資源を共有して生活していた。イスラム教徒とキリスト教徒の住民間の関係は良好で、クリスマスや新年などキリスト教の祭礼や、ミラドゥン・ナヴィ（モハメッドの誕生日）やアイディル・フィティル（断食月であるラマダンの最終日）などのイスラム教の祝祭をともに祝ったりした。

私にとって小学校時代は本当に懐かしい思い出である。学校の行事ではいつも友だちと一緒に踊ったり遊んだりし、村でなにか子たちの競争があるときには私たちがいつも一等賞になったものだった。満月の時には大人も子どもも近所のみんなでゲームをした。月の満ち欠けとともに、夜にはみんなで海岸で火を囲んで眠り、漁師たちが新鮮な魚を持ち帰るのを待った。週末には子どもはみんな川へ行って洗濯をし、お日様の下でそれが乾くまで泳いで遊んだ。畑や家で両親を手伝う子どもたちもいた。

10歳になるころ私は自分に癒しの力が備わっていることを知った。ただ、まわりから差別されたり、孤立してしまうのではないかと思い、クラスメートや友だちには内緒にしていた。私は1歳8ヶ月のときに4mの高さから地面に落ちたことがあり、それからの私の人生は、いわば二度目の人生だった。その事件以降、私には病気になった貧しい村の人々を癒す力が備わったのだ、と教えられた。この秘密は、ある母親が学校にやってきて自分の息子が高熱を出してしまったので助けて欲しいと話したことで、みんなに知られてしまった。この母親は私に家まで来て欲しいのだと先生にお願いしたが、先生は私にそんな力があるとは信じなかった。結局、先生は私が授業を抜けることを認め、私はその母親の家にいったのだった。

貧しい農家では病気になった家族を病院に連れて行くこともできなかった。私はできる限りの応急処置をした上で、患者の安全のために医者に見てもらおうように言った。だが私の処置で症状が改善することもあり、この提案を真剣に聞かない人もいた。附近の町で戦争が開始されたことで、私のこの村での生活は長くは続かなかった。この豊かで美しい村を去る直前まで、私は友人や近所の人のために尽くした。

2、3ヶ月すると戦争は隣の町に迫るほど拡大した。父は移動するのは危険だと考えて、私に親戚のところへ行くのを止めるようにいったが、私はどうしても行くと言い張った。スルタン・クドラット州パリンバン親戚のところに向かう途中、幹線道路は封鎖され陸上ルートも海上ルートもなくなってしまったため、私は旅を中断することになった。戦闘服を着て体にたくさんの弾薬を装備した兵士たちが、大きなトラックに乗って通り過ぎるのを見て私はとても恐くなった。飛行機やヘリコプターが上空を行き交うなかで私は近くの町に行くにはどうしたらいいか尋ねてまわったが、そこには軍隊が駐留しているから行くことはできない、と聞く人みんなに言われた。

その当時、移動映画館というのがよく行われていた。私はこれにボランティアとして加わって、彼らといっしょに隣の町に行った。重武装の国軍の部隊が300~500mごとに配置されていた。部隊のそばを通りすぎるたびに停止させられ、車から降ろされて持ち物検査と身体検査をされた。通行許可証あるいは旅行を認める当局の書類を見せなければならなかった。イスラム教徒であるかどうかに関係なくすべての人が取調べをうけた。もし通過できない場合つまりイスラム教徒である場合、この検問所に残され拘留所に連れて行かれた。

1974年、マルコス大統領はイスラム地域とくにミンダナオ島に対してノー・マンズ・ランド作戦を開始した。この作戦の対象地域では、その村や家のなかで見つけられた人はその場で射殺された。幼児でも子どもでも、年寄りでも障害者でも、イスラム教徒に対しては例外なくそれが実行された。私たちが通過したいくつかの場所でも人々が捕らえられ、国軍によって虐殺されていた。たくさんの家やモスクが焼き払われた。

パリンバンに到着することができた私はそこでたくさんの避難民たちを目にした。そこには私の親戚や友人も含まれており、みな町役場に避難していた。ここでも私の癒しの力が役立った。子どもも大人も含めて、重い病気になっていた親戚たちに処置を施した。ただし秘密でだ。私はとくに症状が重い人と、それから叔母がこの人には処置してほしいと助言した数人にしほって処置をした。処置する間、私は患者の人たちに何があったのか、どうやって国軍の爆撃を逃れたのか尋ねた。彼らが語ったのは以下のようなことだった。

1974年9月11日、ラマダンの13日目の日だった。国軍部隊がマリスボンの村々にやってきた。彼らは白旗を掲げ、自分たちは戦争のためにではなく平和のためにやってきたのだと知らせてまわり、緊急の会合を開くから集まるようにと村人たちに告げた。なかには同意して会合に行ったものもあったが、多くの人々はきっと恐ろしいことが起こるに違いないと考えて山のなかに逃げ込んだ。その会合では女性と子どもは男たちと分けられた。1,500人の男たちが選ばれてモスクのなかに連れて行かれ、女たちは海岸に近い一つの村に集められた。

次の日、モスクのなかの男たちはそのなかで皆殺しにされ、他の男たちも海岸近くで後ろ手に縛られたまま泳げと命じられ、そして海のなかで一人ずつ射殺された。およそ3,000人の女たちは夫や息子が撃ち殺されるのを沖の軍用船の上から眺めさせられた。そして11歳の少女から65歳になる女性までもが昼夜を問わず兵士によって強姦された。その船での一泊が終わると、彼女らは海岸に戻されココナツの林のなかの有刺鉄線で囲まれた場所に18日間、閉じ込められた。女性たちはパリンバンの市長がそこに到着して、彼女達を救出してからやっと解放された。兵士が厳重に監視していたために、誰も逃げ出すことはできなかった。食べるものも水もなかった。毎日のように病気と飢えによって7人から13人の子どもが死んでいき、母親たちがそれを海岸に埋葬した。なかには怒って兵士に挑みかか

る母親もいたが、その場で射殺された。

山に逃げたものたちは、海上からの砲撃と空からの爆撃をうけた。パリンバンの町へと逃げる途中、一週間も食べるものも水もなしに歩きつづけねばならなかったために老人と子どもをはじめとして約半数が死んだ。あまりの空腹に自分の服を食べる者もいた。負った傷は化膿していった。神経が衰弱しあるいは極度の緊張のために、自分の赤ちゃんを置き去りにした母親もいた。移動できるのは夜の間だけ。爆撃機やヘリコプターが彼らを探していたため昼間は立ち止まり、隠れていなければならなかった。森に潜む軍の狙撃兵に見つからなかった者だけが、生き残ってスルタン・クダラット州パリンバンの町にたどり着くことができた。

この話を聞いたとき13歳の私のころは張り裂けそうだった。私はこの避難所にいる寡婦や孤児たちのために何ができるだろうか考えるようになった。私の癒しの処置は彼らが受けた悲しみと不正義、人権侵害に対する答えにはならない。私はこのスルタン・クダラット州パリンバンで見聞きしたことを脳裏に焼き付け、胸に刻んだ。その後、戒厳令が公布され、すべてが秘密となりこの出来事についても誰も話さなくなった。

高校時代

1979年の2月私が高校二年生だったとき、私の村で戦争がはじまった。イスラム教徒の住民たちはキリスト教徒の住民たちの助けをうけて皆避難した。国軍兵士と民兵組織のメンバーたちは、避難民の家財を略奪し住居とモスクを焼き払った。逃げ遅れた子どもや障害者たちは国軍によって殺された。私の家族10人はそれぞれバラバラに逃げた。姉妹たちはジェネラルサントス行き船に乗り、何人かはスルタン・クダラットに向かい、残りはダバオの南にあるパロット島に向かった。6ヶ月経ってからやっと私たちは再会し、一緒に生活することができた。

高校4年生のとき、私は避難所の寡婦や孤児のためにカウンセラーのボランティア活動をはじめた。当時、農村部は軍事化が強められ、殺害や拉致、誘拐、不法な逮捕などが頻発していたために多くの人が都市部へ、とくにこのムスリム避難センターに避難してきていた。二日に一度はラジオでイスラム教徒の市民が殺されたというニュースが流れた。ニュースを聞くと私はその場所へ行って国軍に死体を見せてくれと頼み、犠牲者の家族に連絡を取ってくれるよう頼んだ。犠牲者の親や肉親たちは言語の問題から国軍の取調べを恐れていたため、私は彼らに代わって死体を引き渡すように要求し取調べを受ける活動をしたのだ。役所にいって支援を訴えたが、行政の回答は避難民に対する予算はないという全くなかりするものだった。行政もまた軍の統制下に置かれており、誰にとっても人権侵害を告発するのは危険なこととなっていた。その結果、みんなが泣き寝入りし黙り込んでいた。あるカトリックの司教が不法な逮捕や連れ去りに対してとても積極的な対応を示したことで、カトリック教会の司祭たちが軍キャンプに不法に拘束された人々の家族への支援を開始した。もしこのキリスト教会からの支援がなければ、もっとたくさんの罪のないイスラム教徒が殺されていたのではないだろうか。

ジェネラルサントス市の避難センターで、私はたくさん子どもたちが病気で弱っていて、中には着る服がない子や栄養失調になった子たちがいることに気づいた。毎週末、私は彼らを訪ね、親たちと話した。私たちは一時的に作られたモスクで親たちと子どもの今後について相談した。そのなかでデイケア・センターを作ろうという私の提案も受け入れられた。私たちはデイケア・センターの活動を開始した。私たちが栄養失調の子どもたちに日々の米やミルク、野菜や豆を与えるために支援を要請したことで、6ヶ月後には社会福祉省が食糧の支給を開始した。私は毎日、朝と晩で6人の子どもの面倒を見た。母親たちはローテーションを組んで子どもたちのために料理をした。食事の前には、子どもたちと遊んだり絵を書いたり、読み書きや算数を教えたりした。

2年後には故郷の村に帰ることができる家族もでてきたが、都市のスラムに無権利のまま住みつけねばならない人たちもいた。デイケア・センターで子どもたちと一緒に簡単な計算や読み書きを覚えたことで、母親たちは市場にいて野菜を売るなどして生活を支えることができるようになった。なかには商売に成功して小さな店をもった母親もいた。村に帰った人たちは畑仕事をしながらサリサリ・ストア（小さな雑貨屋）を開くということも覚えた。都会での嫌な経験から親たちは子どもを学校に行かせようと努力した。子どもと家族に教育を与えたことは彼ら自身にとってよい経験となった。

ミンダナオでのNGO活動

ジェネラルサントス市の大学を卒業するとすぐ、私はプロテスタント系の教会に属するNGOで働いた。社会学を副専攻として経済学の学士号を取得したが、専攻した学問はNGOでの活動とは直接関係なかった。私のそれまでの経験をかわれて、1983年に私は山村のコミュニティーでの医療活動に派遣された。翌年にはマリファナの常習者・売人となってしまった高校中退者たちを組織化する仕事を任された。難しい仕事だったが、その若者たちに未来が開かれるようにと願って努力した。

若者の親たちをはじめ村の人たちは私の安全を心配した。私のようにこの村にやってきてながく滞在する若い女性には、違法薬物の中毒になっているこの若者たちに虐待されたり強姦されたりする危険があったからだ。たとえば彼らのチェックポイントを通り過ぎる車が彼らに金を渡さなければ、その車は二度とそこを通ることを許されなかった。それでも私の場合、気を遣ってくれてコミュニティーを案内してくれたのは実はこの若者たちだった。なぜなら彼らは自分たちの状況を変える何らかの方法を見つけなければ、自分たちがより危険になることを知っていたからである。

私は彼らに「やあ」とか「こんにちは」と声をかけることからはじめ、友だちになっていった。彼らは毎朝チェックポイントに集まって通過する人や車を見張った。私はタバコやお菓子をもってこのチェックポイントに行き、笑い話や冗談をいいながら何気ない会話をした。自分の子供時代、学生時代のこと、さらにボランティア活動のことなどを話しながら自分を紹介していった。彼らからいろいろと質問が投げかけられると、私はできるだけ彼らのためになるような形で答えた。たとえば私の活動のことや人生の生き方、社会的な問題などについてである。

一ヶ月もすると彼らの態度が少しずつ変わってきた。他人に対してオープンになり、フレンドリーになったのである。ある時彼らは私にもっと長く自分たちのコミュニティーに残り、自分たちにいろいろと教えたり手助けをしてほしい、ろくでもない今の生活をよいものに変えたい、と言ってきた。私は彼らのグループに招待され、コミュニティーの改善と発展のための活動をはじめた。これは彼らの人生にとってよい変化の兆しだった。彼らは一つの組織をつくり、コミュニティーのなかに収入を生み出すための毎週の取り組み、そして月一のワークショップや会合などで忙しくなっていた。このよい変化は両親や村の人々、さらには町長までを驚かせた。私はみんなからあの危険な若者たちに何をしたのかと尋ねられた。私は彼らと話をし、いっしょに働いて食事をし、差別や隔たりなく彼らを尊重し、彼らの話をしっかりと聞いて理解し、アドバイスを与えたと答えた。自分のやるべきことにしっかりと自信さえもっていれば、こうした問題に取り組むのは単純で簡単なことだった。

1984年、私はこの子どもたちの将来の夢が理解され尊重されるようにしようと、若者たちの母親の組織化をはじめた。この活動のなかで私は母親や父親に読み書きと計算、そして家族計画を教えた。彼らには10人とか9人、少なくとも5、6人の子どもがおり、避妊について教えることがもっとも難しい課題だった。コミュニティーでは栄養失調と貧困が深刻で、彼らにとって避妊は切実に必要なことだった。

1985年、私は読み書きを教える講座の計画コーディネーターになり、同時に山間にある先住民ブラ

ーン族の村で農民のグループを組織することになった。6つの村に講師を派遣し、私が村々をまわって彼らの相談を受けることになった。当時、先住民社会では識字率の低さに漬け込まれて先祖伝来の土地が小資本あるいは大資本によって奪われるという事態が大きな問題となっていた。組織化を通して彼らは自分たちの権利について理解し、そのために闘うようになった。団結して組織を強化し、生計改善計画をつくり、自分たちのコミュニティーをよりよくしていった。彼らは自分たちで「最後の血の一滴まで（闘う）」と言うほど、固く先祖伝来の土地を守るようになった。

1991年、私はブラーン族の地域内にある和平合意エリアに赴任した。その年は、LIC（低烈度紛争）戦略によって罪のない多くの市民を虐殺してきたコラソン・アキノ大統領の任期の最後の年だった。マルコス時代からアキノ時代にかけて、私が見た中でもっとも酷い内戦の場面は、私が活動していたこの6つの村に対する爆撃だった。NPA（新人民軍）と国軍がこの和平合意エリアの真中で戦闘を開始したために、約1,200人が村から避難した。砲弾を受けると家は吹き飛び、農民たちの作物も踏み荒らされ、鶏や豚、山羊も殺されて国軍の食糧にされた。2つのヘリコプターによって村々は爆撃を受け、子どもや母親たちは大きな精神的ショックを受けた。村に帰れるようになるまでの約2週間、皆は教会や学校の建物のなかで避難生活を送った。

1993年、私はモロ女性センターでの活動に集中して取り組んだ。このセンターは主に寡婦や孤児を支援する目的で私たちが設立したもので、松井やより氏がここを訪問したときには主に手工芸品を作って生活を支えるプロジェクトを行っていた。4人の専従スタッフには農民や漁民、物売りをしている会員たちから食糧の提供はあったが、給料を支払うことはできなかった。事務所の維持費は手工芸品の売上から捻出した。モロ女性センターは1992年の創設以来、今でも同じ建物で活動を続けており、コミュニティーの貧しい人々のために医療や教育支援を行っている。

はじめての日本訪問

私のはじめてフィリピンの外へ出たのは1992年12月だった。その年の10月、法政大学から先住民女性フォーラムのゲストとして招請を受けたのだが、ビザ発給に問題が生じて参加することができなかった。やっとビザが下りたのは12月になってからで、それでもとにかく日本を訪問することにした。そしてフォーラムでは講演はできなかったが、東京で様々な小さなNGOやNPOに招かれて話をした。これが私の人生のなかで最初に寒い場所に行き、日本の友人たちと出会い、その社会に触れた旅だった。言葉や伝統、食べ物などの違いに私はカルチャー・ショックを受けた。でも日本の食べ物はおいしくて、私にとっては最高のごちそうだった。

当時、日本の印象を聞かれると詳しく説明するのは難しかったのだが、とても変な感じがする、と答えた。飛行機から下りたとき私はなんだか神様から遠ざかった所にいるような感じがしたのだ。巨大なビルとコンクリートの道路を見て神の創造物を人間がこれほどまでに変えてしまったのかと驚き、自然災害が起こったらいったいどこに避難するつもりだろうかと不思議に思った。発達した通信手段は、人々の間の関係が感情的、精神的に抑うつ的な、隔たったものになっているという印象を私に与えた。この時は一ヶ月と半分、日本に滞在してから、フィリピンに帰国した。

ドイツへの旅

1993年5月、私はドイツから招待をうけた。招待してくれた家族たちは、1980年代と90年代初頭にミンダナオを訪問した人たちで、ドイツにきて自分たちに会い、そしてヨーロッパの国々に触れてはどうかという誘いだった。私にとってそれはミンダナオでの10年間のボランティア活動に一息入れるための短い休暇になった。私は西ドイツ、東ドイツの両方でいろいろなお宅にホームステイし、その

中でゴスラーの町も訪問した。ゴスラーはかつて西側と東側の国境に位置した町である。この古い町にはたくさんの伝統的なドイツ文化と観光名所が残されている。私はホセ・リサルが暮らした家を訪れ、ハイデルブルグにある記念碑にも行った。

ドイツ南部の町エスリンゲンでは、近所の人やボーイフレンド、親類、義理の親からレイプや性的虐待を受けた若者のためのシェルターでホスト・ファミリーといっしょにボランティア活動に参加した。また別の場所ではボスニア、セルビア、トルコ、ユーゴスラビア、そして中東各地からやってきた人々の難民キャンプでも活動に参加した。子どもたちと一緒に参加し、楽しい経験だった。私は彼らの言語を理解することはできなかったが、なかには英語やドイツ語をしゃべる人もいた。ドイツには3ヶ月滞在し、シュツットガルト、フランクフルトの黒い森、そしてコロムやフリーバーク、ゴスラー、ワイマール、さらにフランスも少し訪れた。ここでも私は公園で男の人も女の人も裸で日光浴しているのを見てカルチャー・ショックを受けた。私のようなアジアからの訪問者にとって、これは大変な衝撃だった。

アメリカ訪問

1994年5月、私はアメリカ、シカゴにあるメノナイト中央委員会の交流事業に招待された。もともと1年間の滞在予定だったが、寒さを考慮して8ヶ月に短縮された。私はボランティアとしてパレステイナ女性協会で活動し、またEskwelahang Pinoyつまりフィリピン人移民の子どもたちのための学校でも働いた。この二つのNGOでのボランティア活動とは別に、ペンシルヴァニアやミシガン、ボストン、ニューヨーク、ミネソタ、トロント、カナダのラミントン、そしてシカゴなど各地で講演を行った。そこではミンダナオの先住民女性たち、そしてイスラム教徒とキリスト教徒の関係について話した。

私はアーミッシュの人たちのところにホームステイした。アメリカにいるアーミッシュの人たちの文化と伝統はとても興味深いものだった。米国人の中にはアーミッシュは保守的で、アメリカ社会のなかにながら閉ざされた文化を維持しているために親しくなるのは難しいという人もいるが、私は素晴らしい経験を持つことができた。彼らはフレンドリーな人々である。ただ部外者との結婚の禁止は頑なに守られている。アーミッシュの人々はコミュニティーの中に自分たち自身の手で電気や水道、学校、市場、教会、劇場を造っている。アーミッシュの文化活動グループのメンバーは、フィリピンで一ヶ月間、舞台演技の勉強をしたと教えてくれた。アメリカに戻ってからその経験をもとに演劇グループを結成したそうだ。

マサチューセッツ工科大学 (MIT) のノーム・チョムスキーにも会うことができた。私の友人が彼の研究室に連れて行ってきて、私を紹介してくれたのだ。私はその時、彼がアメリカで超有名人であることを知らなかった。私たちは座って一時間ほどおしゃべりをし、ドールがエクアドルで起こしている問題について話した。ドールの問題について、私はミンダナオの南コタバトでのこの企業の問題についてたくさん話をした。ホームステイ先に帰ってホスト・ファミリーにその話をすると、あなたは素晴らしい幸運だと言われた。彼が訪問者とそんなに長く研究室で話をするのは珍しいそうだ。

KAFIN のボランティア活動

1997年、私は埼玉県川口市にやってきて西川口に住むことになった。最初の年、私はこのあたりにたくさんフィリピン人が住んでいることに気が付かなかった。東京にいる日本人の友人に連絡をとって、山谷と隅田川で暮らしている野宿者の人たちへの支援活動に参加したいとお願いした。彼は私を快く迎え入れ、夜のパトロールに連れて行ってきてくれた。野宿している人たちにおにぎりや味噌汁を配

ってまわった。二、三ヶ月してから、私はフィリピン人はどこで生活していても必ず教会に行くことを思い出し、カトリック教会を探すことにした。私はカトリック浦和教会にオープン・ハウス・センターという、性的人身売買や家庭内暴力(DV)の被害を受けたフィリピン人女性を支援しているNGOがあることを知った。私はここのフィリピン人スタッフに、私もボランティアとして参加させてくれないかとお願ひし、一週間に二日、電話での相談とカウンセリングを行う活動をはじめた。1997年10月のことである。

1998年、私は川口市の青木会館で開かれていた日本語教室に通い始めた。そこで初めて私の近所に住んでいるテリーというフィリピン人の母親に出会うことができた。授業の後、私はテリーとおしゃべりをし、時間が足りないので帰り道の間もずっと話をした。私は最高に幸せだった。なぜなら彼女もミンダナオ出身で、私と同じミンダナオの言語を話すことができたのだ。彼女は1歳の息子を持つごく普通のお母さんだった。私が詳しく自己紹介して浦和のオープン・ハウス・センターでのボランティア活動の話をする、彼女は問題を抱えている別のフィリピン人の母親のことを教えてくれた。

正午に授業が終わると、私たちはテリーの家でその別のフィリピン人の女性と一緒に昼食をとった。食事を終えてから互いに自己紹介をし、それぞれの経験や日本での問題などについて話し合った。楽しい笑い話もあれば、涙がこぼれるような話もあった。これがフィリピン語のジェンダー用語でいうところの「talakayang babae」つまりグループ・カウンセリングだ、というようなことは彼女たちは知らなかった。DV被害を受けているその女性は、話し終わるとすこし元気になったようだった。私は彼女に、あなたの二人の息子に会わせてほしい、そして旦那さんに私を紹介してほしい、と提案した。彼女の夫と会って、私は少しの日本語とそして英語で会話をしようとした。彼は妻が離婚しているのだ、という話をした。私は週末には一緒に子どもを連れて外出し、一緒に面倒を見ること、そして関係が良くないなら離婚についてしっかり話し合いをするように、と助言した。子どもを私が預かって、その夫婦が一日一緒に外出できるようにしてあげたこともあった。その時帰ってきた二人はとても穏やかで幸せそうだった。私は彼らには意思疎通が不足していて、お互いに誤解が生じていたのだと気づいた。それが喧嘩のもとになっていたのだ。彼らは1歳の男の子と6ヶ月の女の子を抱えて離婚するのは容易ではないことを理解し、離婚届を出すのはやめにした。関係を修復していまも子どもたちと一緒に暮らしている。

私は週末、スーパーに家族といっしょに買い物にくるフィリピン人の母親を見つける、ということをはじめた。そのせいで日本語教室に参加するフィリピン人の母親がどんどん増えていった。スーパーでフィリピン人を見つけると私は電話番号を交換して、青木会館の日本語教室に誘ったのだ。いつも私たちはテリーの家でランチ・ミーティングを持ち、その参加者もはじめの3人から7人、10人と増えていった。私はなにか問題が起こったときにお互いに助け合うために川口にフィリピン人協会を創ってはどうかというアイデアを出し、みんなで相談をした。みんなの意見は、フィリピン人の母親と日本人の母親との間のシスターフッドを創ろうというコンセプトでまとまった。私たちは団体の名前を「エンパワーメントのための川口フィリピン人会：KAFIN」に決めた。

私たちは自分たちが抱える問題やコミュニティーが必要としている事柄に基づいてグループの具体的な計画を作ることにした。フィリピン人の母親たちが抱えている最も大きな問題はお金だった。そこで私たちはパラワガン、つまり共同貯金をおこなってメンバーが誰か緊急事態になった時に備えることにした。二つ目の問題は、夫の家族から外国人妻への差別の問題である。フィリピン料理を作らせてくれないこと、手で食事をとることやタガログ語で電話することを嫌われる、などの問題がおこっていた。そこで私たちは川口市が開催するインターナショナル・フェスティバルに参加してフィリピンの伝統的なダンスを披露したり、フィリピン料理を販売したりした。そこに夫の家族を招待して、ダンスを見てフィリピン料理を食べてもらい、自分たちを認めてもらおうとした。三つ目の取り組みは、日本人とフィリピン人の間に生まれた子どもたちに英語教室を開いて、フィリピンの人々や文化、

歴史について英会話を通して学んでもらおうというものだった。これは子どもたちが学校から帰ってきて、「ママ、どうしてフィリピン人は悪いの？ママと喧嘩しているときにパパもそう言ってたし、学校の友だちもそう言うんだ」と母親に尋ねるといようなことがおこっていたからである。

この日本人とフィリピン人の家族の中でおこっていたの三つの主要な問題に取り組んでから、私たちは活動をさらに広げ、DVや子どもの教育、医療、国際結婚、職場での問題などへの地域コミュニティに根ざした援助体制を創る活動を開始した。

KAFINEは埼玉県川口市に1998年4月18日に設立された。そして2000年に名称をKAFINE（エンパワメントのための川口フィリピン人会）からKAFIN（Kalipunan ng Filipino na Nagkakaisa：団結したフィリピン人の会）に変更した。これは私たちの団体が2000年には大阪に、2001年には名古屋に、さらに2003年群馬、2004年東京と名古屋、2005年新潟と横浜へとどんどん拡大していったからである。地域コミュニティに根ざした援助体制というコンセプトは、緊急事態に陥った個人を援助するための最善の考えであろう。日本社会では特にストレスやうつ病が日本人にとっても、外国人にとっても大きな問題となっている。KAFINは主にフィリピン人と日本人の個人からなるNPO組織であり、日本で生活するフィリピン人移民の権利と福祉のために具体的なプログラムとプロジェクトを立てて活動をしている。KAFINは地域に根ざして活動を展開する自立したNPOであり、民衆に奉仕するためには団結とエンパワーが重要だという信念をその基礎に置いている。KAFINは基本的にいかなる財団からの助成金にも依存せずに活動している。

KAFINの取り組み

DVと人身売買はKAFINが取り組むもっとも重要な課題である。KAFINには毎日7件から9件の電話がかかってくる。その大半は精神的あるいは肉体的なDVの被害者からのものである。被害者の話からは、このDVが外国人妻たちにとって非常に差別的な側面をもっていることがわかる。たとえば日本人の夫がフィリピン人妻を虐待する際に次のような言葉を投げつけることがある。「いいか。もし俺がしたことを誰かに言ってみろ、ピザの更新をしないからな。それともお前をフィリピンに送り返してやる。だが子どもは日本に残すぞ。お前には日本国籍はないが、子どもたちには国籍があるんだからな。」

これは単なるDV問題ではない。日本社会において移民は不可視の存在として扱われる傾向にある。彼女たちの問題は放置されている。移民たちが抱える問題のなかでも、DV被害者たちは日本社会の差別的なシステムのもとでもっとも視えない存在にされ、弱い立場におかれている。日本人夫が暴力をふるっているにもかかわらず、常に外国人妻が責められ犯罪者として扱われる。2006年3月23日、NHKニュースは東京に住むあるタイ人妻のケースを報じた。この女性は14年間にわたって日本人男性と婚姻関係にあり、一人の子どもももうけたが、彼女は10年以上にわたって夫からの暴力を受けていた。ある時には夫がアイロンで彼女の頭部を殴打したという。だが警察はこの事件の捜査を始めるとタイ人女性のほうを逮捕した。夫がピザの更新手続きを取らなかったために、女性はオーバーステイになってしまったというのである。本当の犯罪者は逮捕されなかった。その理由は彼が日本人だからである。

DVは子どもたちにも影響をおよぼす。母親があざができるほど殴打される様子を目撃することにより、直接に虐待されていなくても子どもたちには心理的、精神的な影響がおよぶのである。母親に対する虐待を目撃した子どもには抑うつ、精神障害、喘息、他の子どもへのいじめ、トラウマなどが見られたとする報告もある。最近KAFINが支援したある事例について述べたい。彼女は結婚して10年、子どもが二人いる。上の子は祖父母と暮らしており、4歳になる下の子は両親と暮らしている。両親は毎日けんかをし、4歳の少年は毎日それを見ていた。父親が母親の服を無理やり脱がして殴る蹴るの暴

行を加え、さらに窓につき飛ばしたときには、少年は声を殺して泣きながら「やめて、お父さん！お母さんがかわいそう！」と父親に言ったという。母親の体があざだらけになり、頭から血が流れるのを見てから、その子どもは喘息を発症した。いまでもその子は喘息もちで精神的にも不安定だ。トラウマから彼は夜中になると泣き出す。母親のほうも夫に胸を強く蹴られてから、右の胸部の痛みが消えない。

2004年のある事例では、母親と子どもたちが繰り返されたDVによって精神障害を負っていた。そのフィリピン人妻は夫がビザの更新をしてくれなくなることや、子どもが夫の実家に連れて行かれてしまうことを恐れて、家から出ようとしなかった。彼女は現在、子どもと会うことができない。また最近も類似した事例が3件あった。私たちは被害者たちに対してフィリピンに帰って家族の助けもかりて、適切な治療を受けるよう説得したが、そのフィリピン女性たちは帰国を拒んだ。これは例外的な話ではない。フィリピン人の移民たちに「いつ国に帰るつもりか」と聞くと、いつも同じ答えが返ってくる。「帰る予定はない」と。現在のフィリピンの状況のなかではとくにそうだ。DVと人身売買にKAFINが取り組むなかで、特に被害者が精神的な病を負っている場合、この帰国できないという状況はもっとも困難な問題である。

人身売買の事例

2004年、KAFIN名古屋は10人のフィリピン人女性を救出した。彼女たちは6ヶ月間、エンターテイナーとして働く契約をして日本に来ていた。契約には記されていなかったが、実際には客をよぶために裸で踊ることが強制された。経営者の言うことを聞かなければ、罰金が科せられて6万円の月給から引かれた。裸で踊ることを拒否したために給料以上に罰金を払わせられ、給料がもらえないものもいた。この罰金のほかにもマネージャーの要求に従わなければ、食事を抜かれるという罰則もあった。

2001年 Bayaning Filipino 賞（アジア太平洋部門）の受賞

2001年、私は浦和オープン・ハウス・センターからBayaning Filipino賞に日本からの候補として経歴を送ってはどうかという提案を受けた。それが何なのかよくわからないまま、私はプロフィールを審査委員会に送った。私は日本から応募した6人のフィリピン人の一人で、そのほとんどの応募者が10年とか、12年、15年、あるいは20年も日本に住んでいる人たちだった。みな何年にもわたってボランティア活動をしている人たちだ。私といえば、当時日本に住んでたったの5年で、6人のなかではもっとも若い応募者だった。ところが驚いたことに、私は日本にいるフィリピン人移民の代表としてこのアジア太平洋部門の候補者に選ばれてしまった。私は困った。他の応募者のなかにはたった5年しかフィリピン人移民の支援活動をしていない私がどうして候補に選ばれるのか、信じられない、という人もいたからである。実は候補者の選出には、日本に来る以前にフィリピンで行った活動と業績も含まれていたのだ。

私のもとに主催団体から、マニラでの最終発表の場に出席するようにとの手紙が届いた。マニラに赴き、この国際的な賞の授賞式に出席した。その夜、テレビ局ABS-CBNが選出した候補者たちがシンガポール、サイパン、韓国、日本からマニラに集まっていた。

最終発表はスタジオで行われ、テレビでフィリピン全国に放送された。国内部門賞とアジア太平洋部門賞の発表では、すべての候補者が名前を読み上げられステージに上がった。みな緊張し、誰が受賞するだろうかとドキドキしていた。まずはじめに個人の部の受賞者が発表された。それからたくさんの歌手や女優が出演するコーナーがあり、次に国内部門賞が発表された。さらに最優秀賞が、そして最後にアジア太平洋部門賞が発表される。たくさんの歌とダンスのコーナーがあってもう夜中の0

時30分になってから、アジア太平洋部門賞の受賞者として私の名前が呼ばれた。私は本当にびっくりした。ほかの候補者たちのほうがずっと長く活動しており、私が選ばれるなんて夢にも思っていなかった。選考では海外での活動と同時にフィリピンでの活動が考慮されたのだが、大半の候補者は海外でだけ活動していて、フィリピンでの経験がなかったのだった。

ミンダナオと日本でのボランティア活動

私は今、日本で暮らしている。日本で困難を抱えたフィリピン人移民のためにボランティア活動をしているのである。助けを必要としている人のためのボランティア活動に生活を捧げることは、私の喜びであり楽しみでもある。KAFINスタッフとしての無給の専従活動は、その仕事を心から理解していなければならないものではない。だから時々フィリピン人の仲間たちからは、どうしてお金になる仕事をしないのか、どうしてボランティア活動にばかり時間を使っているのか、と聞かれる。私は、困っているフィリピン人の同胞のこと聞いたり見たりすれば放っておけないのだ、と答えることにしている。

自分の国、フィリピンには年に一度か二度帰っているがこれも義務としてではなく、必要としている人への援助を続けるためのボランティア活動の一貫である。故郷ミンダナオのことは外国に暮らしていても決して忘れたことはない。私はそこで生まれ、成長し、さまざまな経験を積んだ。たくさんの日本のよき友人や住民たちのおかげで、私たちはミンダナオと日本で援助を必要としている人たちのためにリサイクル品を集め、これを日本で暮らしているフィリピン人のシングル・マザーとその子どもたち、そしてミンダナオで暮らしている寡婦や孤児たちに送っている。毎年、私は日本の友人たちとミンダナオに行つてこれらの物資を配り、同時にコミュニティーで無償の医療支援を行つてきた。

忘れられない思い出

1989年のはじめに私はジェネラルサントスから9人の代表とともに、マニラ首都圏で開かれた会議に出席した。そのうち4人はマスコミの人で、のこりの5人はミンダナオの先住民から様々な階層を代表していた。私たちはジェネラルサントスからマニラまで船で移動した。このフィリピンの南から北までの船旅には3日間かかった。その途中、船は積荷と旅客を乗り降りさせるために、2つの港に立ち寄った。ザンボアンガ市での7時間の停泊中、私は友人と外出した。その時、二人の男性がやってくる私にナイフと銃を突きつけ、おとなしく言うとおりに歩けと言う。道を歩く間、叫ぶことも泣くことも許されなかった。警察官が見えたので私は叫ぼうとしたが、撃ち殺される恐れがありできなかった。私は犯人に従い車に乗り込んだ。私たちは倉庫らしき場所に連れて行かれ、その倉庫の裏にある小さな小屋に入れられた。

そのなかには大きな男たちがたくさんいた。私は犯人に何が欲しいのか、カメラか、お金か、ネックレスかと尋ねた。「欲しいものはなんでもあげるから。とにかく船に帰して。友人たちが待っているの。多分、私たちを探しているわ。とにかく放して！」犯人が言った。「とにかく落ち着けよ、お嬢さん。ボスがいまこっちに来るところだ。」「ボスはどこにいるの？ボスと話したいわ。ボスの所に連れて行って。」数分してボスが到着した。彼はとても親切で、いかにもプロといった感じだった。私はそのボスに言った。「お願いですから、私たちを解放してください。もう私のお金と持ち物はすべて渡しました。ほかに何が欲しいのですか。お願いします。ここから出してください。私はお金持ちではありませんよ。私のIDを見てください。私は貧しい人たちを支援している単なるボランティアです。お願いだから、とにかく助けて！」私がこの犯人たちのボスと話しているあいだ、私の友人はショックのあまり意識を失っていた。私はボスに彼女が心臓発作になっており、すぐに助けたいと

告げた。しかし周りの男たちは、死んでしまえば海に放り捨てるまでで好都合だと言う。私はやめると叫んだ。「彼女を殺すつもりなら、その前に私を殺しなさい。私は死んでもいい。どんなことが起ころうと覚悟はできている。私たちの人生は神から与えられたものに過ぎない。いつかはこの命も神の手に返すときがくるのよ。神によって我々は人間としてこの地球上に生きているのよ。」私たちを釈放するように説得するため、私はとにかくたくさんしゃべった。彼らは黙って聞いていた。そして一人の男が叫んだ。「お前はしゃべりすぎだ。こっちに来て！一人でいろ。」私は友人と別にされて小さな部屋に6時間監禁された。もしも強姦されそうになったら抵抗して逃げ出すことができるように、私は友人にポケットに砂を入れておくよう言った。大柄な男が私のところやって来て言った。「お前は頭がいいし、勇気があるな。俺たちの仲間にならないか？それだけ勇気があればリーダーにだってなれるぜ。」「あの、悪いんですが。私は人間や動物を殺したりできないんです。人からお金や物を盗むこともできないし。虐げられていたり、差別されていたりしている人を助ける、というのだったらできますけど。」

「すいませんが、私をボスのところへもう一度連れて行ってもらえませんか。どうしても彼ともう一度話をしたいのです。」すぐに彼は私をボスのところに連れて行ってくれた。私はマニラへの旅の目的についてすべて説明した。ミンダナオの女性たちの状況について講演しなければならぬので、どうしても時間どおりにマニラに行かねばならないことを説明したのだ。二時間ほど議論すると、彼らはこの出来事についてマスコミや警察に一切報告しないことを条件として私たちを解放し帰りのジブニー代として20ペソを渡した。

1994年にアメリカに行ったときには、良い出来事と悪い出来事があった。良い出来事は、シカゴで3日間過ごした後のことだ。私はホームステイ先の家から4駅離れた友人のところに泊まった。その帰り道、私は道に迷ってしまった。誰かに尋ねようにも人通りもなく公衆電話も見つからない。誰か見つけようと私は歩きつづけた。すると家のベランダで植物に水やりをしている年配の女性を見つけた。

私は彼女の家のドアをノックし、自分はフィリピンから来たのだが道に迷っていると説明した。その年配の女性はうれしそうに私を家のなかに迎え入れてくれた。コーヒーを作ってくれて、朝食まで食べさせてくれた上に、食べ終わったら車で送ってあげようと言ってくれる。彼女が言うには自分が入院していたときにフィリピン人の看護師が面倒を見てくれて、とても親切にしてもらったという。だから私がフィリピン人だと聞いたとき彼女はうれしそうだったのだ。彼女はもし週末時間があるのなら一緒にピクニックに出かけよう、シカゴの町を案内してあげよう、と誘ってくれた。

悪い思い出は、パレスティナ人のコミュニティーに行くために一時間半の道のりを移動していたときのこと。毎日、そこに行くのに電車とバスを利用していた。毎朝夕にその途中でアフリカ系アメリカ人の都市スラム地区を通り過ぎる。ある日、乗客が一人バスから降りるために停車すると、突然、若者のグループの間で銃撃戦が始まった。道路を挟んで銃撃が繰り広げられるとみな悲鳴をあげバスのなかにはパニック状態。私はバスのなかで眠っていたのだが、銃声に気づいて目を覚ますとすぐに運転席の椅子の下にもぐりこんだ。他の乗客はいすに座ったまま泣き叫んでいた。私はそこがどこなのか、考える余裕もなかった。バスが再び走り出してから私は席にもどると、他の乗客は私のほうをじろじろ見ている。私はただ自分の体を隠しただけなのだし、気にしないことにした。

そのバスを降りてから電車に乗り換えた。バスでの出来事はいったい何だったのだろうと考えているうちに、電車は目的の駅に到着した。電車から降りて一人で歩いていると、若い男が一人近づいてきて、金を出せ、と言う。私は正直に、お金は持っていない、と言った。しかし彼は金を出せと要求しつづけて、もし出さないなら殺すぞと言う。「本当に悪いんだけど、お金を持っていないのです。」彼は銃を突きつけてカバンをよこせ、と言った。カバンを奪うと彼は走っていった。だが、私は追いかけてカバンを返してと叫んだ。中にはパスポートが入っていたのだ。「私は外国人よ。お金は持っていない。カバンを返して。パスポートが入っているの。お願い！」彼はカバンのなかをあさって50

ルを見つけるとそれを抜き取ってから、カバンを私に投げ返した。

私は怯え緊張したまま家に帰り、警察を呼んで起こったことを話した。ホスト・ファミリーからは、もし金を要求されたら迷わずに渡すようにと言われた。拒めば非常に危険で、悪くすれば殺されるかもしれないということだった。そういう場合に備えて、みなポケットにいつも5ドルを入れている。私もカバンのなかに5ドル入れていたのだが、とっさの出来事でそのことは忘れていた。結局、カバンのなかの5ドルを見つけたのは、その男だったのだった。

【日本語訳 河合大輔】